
ハクモノガタリ

ALFRED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒャクモノガタリ

【Nコード】

N6881E

【作者名】

ALFRED

【あらすじ】

オムニバス（複数の物語）形式で語る、いたって普通の百物語。しかし、百物語とは本来、何のために語られるのだろうか……？ ALF小説の案内人、静とその愉快なアパート住民が、語る……百物語とは（注：ルール上、百話はさすがにかけねえ！

発端 行き詰まった小説家

〳〵百物語〳〵

はあ？ 怪談を話せ？ 小説の題材だと？

……あのなあ、素人が絡むとロクでもねえんだぞ。俺も玄人とはいえんが。

そうだなあ……

【病院】

何処へ行こうと、まず天国と地獄に一番近い場所ってのは、このことだよな。

現実でも幻想でも。

毎日、誰かが死ぬ、とかじゃない。

もはや【病院】って言の葉が、意味論的にそういう場所、になりつつあるんだ。

なお、無医村や住宅街の小さな『病院』ってのは、これに含まれない。

系列的には立派な病院には違いないが……ここには、アレがない。

『死』がね。

絶対的不可逆な、避けようの無い運命、『死』。

これは、動植物にしか存在しない、人間的価値観から生み出され

た『終焉』、『消滅』の意味を凝縮した一言だ。

……やべ、タナトスについては話すのは止めよう。

誰だって、人生を生きるなら『死』に畏怖と憧憬を覚えるものさ。俺の知る死は、ちよいと話をするにはきつ過ぎる。

話戻して病院だな。

でかい病院になると、死体安置所やら……な？ 題材にこと欠かさないだろう？

【学校】

そういえば、よく学校が題材になるけど、え？ 今はラブコメ？

……俺がガキだったときは、学校の怪談が流行ってたんだよ。

妖怪、物の怪、幽霊、えとせとら……ガキの頃はマジで信じていたのもあれば、怖いのに怖くないって意地張ってたな。

病院との接点の違いは……どっちかって言うと、コミカルホラー……肝試しの要素が強いつてことか。

最初は子供たちの、お遊びに過ぎなかったんだが……わからないかい？

実在にいくつか起こっちゃったんだよ。殺人が。

まあ普通ならここで話しに続くんだが、悪いがねえ。殺人も糞も赤マントも紫の鏡も行方不明もまったく皆無。

つつか、行方不明になったら話にすらならねえよ。話す主人公が

いねえんだから。

ただ、学校が社会的空間であるのに、そういう話が集中するのは……集まるのが子供あかりだからだろうな。

ホラ、子供って現実非現実の区別ってつきにくいじゃん。

【百物語】

語源を調べようと思ったが、面倒くさいので却下。

つつか、霊界への入り口を開くための儀式だって、ぬゝべゝ先生が言ってなかったかな？

恐山って霊の溜まり場って言われているけど、あそこって霊界への入り口、とか言われているんだよな。

実際？ そんなもん知るかよ。霊能者に話を聞いてくれ。

俺は自分が見たもの聞いたもの、そして感じたことにプラスして直感と勘と思考考察したことしか話せないんだから。

だからよ、百物語をしたら、何が起るかなんてわからないんだって。

~~~~~

### アフターストーリー

「と言うわけで、百物語を始めようか」

「きゃあ！ 急にライトドアップで登場しないでください！ この馬鹿兄貴！」

ぬうん、と自分で効果音を演出する馬鹿であることこの俺、靜聖夜はのほほと変人笑いを飛ばしながら……集まってくれた皆を見渡す。

ボロアパートの住民（なんと全員集合！拍手）に、しおみんとその猫（珠ちゃん）、あと変体夫婦とか、俺の仕事仲間数人。

まあこの辺りの登場人物は物語に関係ないから読み飛ばしてOK！

主役は、これから語られる人物たちだ。あ、でもノンフィクションではねえぜ。

言ったよな。

「俺は自分が見たもの聞いたもの、そして感じたことにプラスして直感と勘と思考考察したことしか話せないんだから。」

「じゃあ始めるか。言いだしっぺは俺だから、一番手貰うぜ」

こうして、ボロアパート住民、靜企画。

清原太平発端、百物語の始まり始まり……

## 【病院】

### 【病院】

しとしとと雨の降る日の話だ。

と言つても、幽霊の話とかお化けの話かと問われると、少し不思議なお話。

夏には、打ってつけの物語。

その病院はオンボロだった。

いや、病院の建物自体はそう古くは無い。設備だつて整っていた。いや、後者は半分、嘘である。

長年の経営不振と経費削減のため、設備の備品が徐々に老化、取替えようにも在庫も底をつき始め、院内は程よい感じにピリピリしていた。

この話は、本来語られない話。

せいぜい生き残ったのは、精神科の先生くらいか。

あと、痴呆のおばあちゃん。鏡の前で、もういない自分のお爺ちゃんと会話する人だ。

くちや……くちや、おじいさんや？ あはは、あはは……くちやくちやくちや……。

精神科の先生は「これは、脳が自分のおじいちゃんが目の前にいる。と言つ認識をしているからよ？ ほら、あのりんごを見て？」

と、りんごを示す。

「これは何色に見えます？」

「そう、赤色ね。これは脳が、『りんごが赤いですよ』と認識しているからよ。」

私たちは、脳から来ている情報に支配されているの」

「あのお婆ちゃんもそう。見えないのに、見えると脳が認識しているのよ」

話を戻して、老朽化した病院内だ。

不慣れな新人看護師がミスをしでかすわ、

それを婦長が怒るわ、

医師は経営不振にイライラ、

別の医師はさらに給料の振込みが遅いとか、

……まさに泣き面に蜂……

そんなときに起こった、とある患者の容態の急変。

バタバタバタ、ガヤガヤガヤ、……飛び交う指示、手渡る医療機器、

カチャカチャ、運び込まれる機材、

ガヤガヤ、バタバタバタバ

医師と看護婦たちは迅速に行動をしたが、募った不満が焦りを呼んで……ついにはやってしまった、医療ミス。

俺も名称は知らないが、薬になるはずの薬品が、その患者には毒になっちゃってたな。

即死 薬品を運んだのは新人看護師、指示したのは医師、その場の全員、時が止まっていた。

責任がどうのこうの、私が悪いの、どう報告する？ 誰もが慌てたその中で、一際か細い声が、響いたんだ。



「隠せないか？」

急変だったため、手術は病室で行われ、目撃者はなし。いや、さっきの痴呆のおばちゃんがケタケタケタと笑って見ていただけ。

ほかに……、目撃者はいない

ストレスがピークに達していた医師たちは、その薬品の隠滅のため、死体を一旦、別室へ。

だが、そのときまた別の、今度は外来から運び込まれてきた。医師たちは焦った。これから隠滅のためにいろいろせねばならぬのに。

やって来た救急隊員たちには頑なに断り、そして死体を別室へ運び込み、薬品隠滅のため、室内を暖かくし始めた。

ひと段落して戻ると……

外来に急患が、置き去りにされていたんですね。

医師たちは激昂したが、そこへ新たな医師が現れて、その患者を観察し、驚くべき事実を告げる。

「現代では見られない奇病だ。これを解明すれば、この病院が救えるんじゃないか？」

その病気は、全身が崩れ、内臓を溶かし、緑色のグジャグジャと音立てる、不気味な見たことも無い病で

「感染の恐れもあるから気をつけろ」と、新たな医師は告げ、婦長に一旦、その患者を一任します。

ぐじゆるじゆる……

病院に暇はありません。急患もさることながら、事件の医師たちは死体を隠蔽しつつ、夜勤をこなさなければなりません。

新人の看護師は、注射が下手でした。

そして、患者を死なせてしまったのも、注射でした。

婦長にいつもしかられ、ベテラン先輩には怒られ、そのストレスは限界でした。ぐじゆるじゆる……

そんな不満を抱えていたころ。

あの、奇病の急患者が逃げました。

見張っていた婦長さんが倒れており、空調の管にはあの緑色の汁が……ネトネト、ベトベト……

婦長さんに幸い怪我はなく、別室で休ませることになり、医師たちは今度は逃げ出した『患者』を見つけ出さなければなりません。つつか、その時点で逃げ出せば良かったのに、と。

医師として、院内の患者を守る義務を捨てても、それはできません。

なぜなら、死体を隠蔽中だから……

そのうち、あの奇病の急患者を看ていた婦長さんの様子がおかしくなりました。

急に上の空になって、使い捨ての注射器を持ち出して「もお、こんなに無駄遣いしちゃって」「消毒すれば、また使えるじゃない」と……

ブクブクブク

ブ  
オ  
ジ  
ュ  
ワ  
ア  
ア  
ア

自らの手ごと、熱湯で注射器を消毒しようとしました。

もちろん婦長さんの手は真っ赤に膨れ上がって、それでも婦長さんは笑っています。

気がついた先輩看護師が叫んで、ようやく婦長が悲鳴をあげます

緑色の液体を吐き出しました。

すぐに医師が駆けつけて、ビニールシートを被せて、別室に運びました。

すでに婦長さんは目や火傷跡から、真緑の液体を流して、そして死んでしまいました。

医師が遺体を調べ、内臓が溶けている、急患者と症状が一緒だと戦慄しました。

そう、未知の病気は、感染することが立証された瞬間でした。

その魔の手は、新人の看護士にも向かいました。

先輩の看護師が落ちこんだ後輩を見に行くと……

自分の腕に何本も注射をぶっ刺して、ケタケタ笑っています。

「先輩、私、もう注射が打てるようになりましたよ。」

あはははは、

あはははは、

[illegible]

ゴルブチャア

先輩看護師は逃げ出しました。

カッカッカカ　パタパタパタ

その頃、医師たちは逃げた急患者を見つけ出そうとして、必死になって探しています。

しかし、探していた医師の一人が　二手に分かれた際に襲われたようで、

真緑の目をしたまま、　クワツ！　「逃げろ」と言い残し、絶命してしまいました。

と、そこへ急患者を最初に観察した新しい医師が「新しい事実を発見した」と、言い放ちました。

医師は「すぐに警察、医師連に連絡しよう」と言いますが、新しい医師は「だめだ」と言い、「我々で調べきるんだ」と頑なです。

と、そのうちにあの新人看護師が死んでいるのを聞かされ、ふと先輩看護師はどうなったか……

その時間帯は、あの死体を交代で見張る時間帯でしたので、証拠隠滅中の部屋にやってきました。

トクトク……トクトクトク

先輩看護師は……死体に輸血してました。

真っ赤な鮮血は、すぐに黒い緑色の液体に変色してしまい、医師は戦慄します。

その背後に

死んだはずの婦長が立っていました。

「さあ、先生も一緒に」

何が一緒に、なんでしょう。手には緑色の液体の入った、注射器……

足元には先輩看護師の緑色になって倒れた死体。

医師は思わず逃げ出し、あの新しい医師に掴みかかりました。

「もう、皆死んでしまった。これはアンタが仕組んだんだな」

「違う、この病は、人の心に感染する病だよ」

「アンタか、誰だかが発見した新種のウィルスの実験が何かなんだろっ！」

医師はほとんど発狂寸前でした。

「君は現実と仮想との区別がなくなっているね」

ふと、この新しい医師には言われたくないなとは思っただな。

オチを言おう、この【新しい医師】……ふと、医師が気づくと、鏡に映ってないんだ。

しかも、この新しい医師の顔、名前　どこかで見たことがあるような気がしたんだ。

悲鳴。ただし、誰かが襲われたとか、そんな悲鳴ではない。

精神科の女性医師が、新人看護師の注射漬けの遺体を発見し、その傍で真っ赤な白衣を身にまとった、医師を見つけてしまったから。傍に、あの新しい医師は、いなくなっていた。

あわてて、死体部屋へと向かって……そこで死んでいる先輩看護

士たちを見て、気づく。

緑色、        じゃない。

とにかく死体をもとの部屋へと運ぼうとして、ネームプレートを見て、気づく。

その患者の名前、さっきの幽霊医師と同じ名前で見れば……あの医師の顔だった。顔を良く見

真緑に見えていたのは、紛れもない血液で    ほかの看護師、医師たちの遺体を確認しても、どれも……血まみれだった。

だけど……鏡に映った自分の手、何処で切ったか知らない切り傷からは、

緑色の血が流れていた。

鏡越しには紅いのに、医師には赤が緑に見えていた。

その後、医師の行方を知るものはいない。

殺人事件として、事件は終えるはずだったが……薄く笑う痴呆のお婆ちゃん。そして第一発見の精神科医の医師は……ふと気づく。

あの光、なんで緑色なのかしら？    救急車の赤色灯を見据え、次に……消防用のランプ……

……なんで、緑色？

~~~~~

「静兄さん、それ、この間見たビデオのまんまじゃないですか」

「おろ？ あそこか、姫うちと一緒に見てたんだっけ……あれ？

じゃあ安寿とスフィーと一緒に見たのって」

「ちょw オマ 妹と彼女と何見てんだよ」

「いや、百物語の予習に（笑）」

「まんまパクっちゃ駄目だろう」

「でも、百の怖い話の一つとしては、十分過ぎる面白怖さには違いないだろう？

それに、フィクション、ノンフィクションって決まりはないし、いいじゃん、映画でも。」

「さあって、この事件の犯人は誰なんだろう？」

「むつ、静……それはミステリーホラー、推理物なのか？」

「いいえ、普通のホラーっすけど、俺の式には、これ犯人いるって直感が」

「静、映画なのでしょう？」

「あれ？ いつ、俺この話が映画だって言った？」

『フイ！』

~~~~~

精神科の先生が、色識別の器官に異常があると訴えて、院内で治療を受け始めたころ

使われていない一室の掃除用具ロッカーから、小さな悲鳴が聞こえ続ける。

タスケテ……タスケテ……

ロッカーの隙間から腕が伸び、ぼとりとおちた。  
まるで、何かに溶かされたように……

緑色の、腕だった。



## 【学校】

## 【学校】

おっと、また俺のターンか。  
次は学校行こうか。

昔は学校の怪談って映画がシリーズでやってたんだが、姫ツチ世代は知ってるかな？

あ……やっぱ知らない、か。

俺が中学辺りで廃れたからなあ。架空の恐怖より、現実の恐怖のほうがいよいよ怖いしな。

で、この学校の話ってのは、「紫の鏡」から始まる。

~~~~~

学校の怪談の話にこぎつけて、小学生の数人が集まって、肝試しをやることにしたんだ。

だが、そこで起こった不思議な怪現象。

運動場に、懐中電灯を持って、全員集合。

気分を引き上げるために、懐中電灯は二つだけ……

気を引き締めて、集まった六人は学校にタッタッタと侵入していくんだ。

さて、この学校にある教室のドアの窓と、廊下に面した手洗い場
金属製の洗面所にある鏡と窓で、実は『鏡合わせ』ができあが

っちゃうんだな。

今の小学校にはあるのかな、廊下の手洗い場。便所に備わってる奴じゃなくて、単に手洗いのみ、洗面所だけってやつ。

まあ、俺の学校にはあったんだよ。細長くて金属製で、よくゴミゴシ掃除してたよ。

でだ、その合わせ鏡が出来上がっちゃって、急に鏡が紫に輝きだしてな、生徒が全員、飲み込まれちゃったんだよ。

紫の鏡、で連想して現れるのは紫婆つてのが相場かな？　だかコイツはこの話では単なる入り口。

紫って色霊では『成仏』『霊界』とかの意味に当たるんだとさ。

で、次はアリスの話になっちゃう。

鏡の世界だ。

ただし、そこは現実の学校で、現実の世界で、鏡合わせみたいにアベコベになった世界。

なんでアベコベって言うんだろうね、リナっち、検索して後で調べてみて。

生徒たちは脱出を考え、もう一度合わせ鏡を作ろうとして、ガシ
イツ！　で、何か変なものに阻まれたんだ。

ハラハラハラ、どき、どき、ドキッ、ドキッドキドキ
最初に気づいた生徒は、足に何かが絡まっている、と思って、
バクバクバク、バクッバクッバク！

……足元を見たら……

下半身の無い人に、捕まえられてたんだ。「あし、くれ……」っ

て。

はい、有名なテケテケさんですね。

思わず悲鳴をあげて逃げ出した先には、運動会で使う大玉が転がってきて、ニヤリ、と口だけが笑ったんだ。

まるでゲームみたいな大口が開いて、中から犬歯が剥き出しに見えて、生徒たちは一斉に逆走。

ところが、覚えていた道と場所がまったく違う。

なぜなら、鏡向こうの世界だからね。道順も全部あべこべになっ
てしまったんだ

見覚えがあるけど、逆転した世界で混乱していると、どこかの部屋から音楽が　音楽室が近い。

そして音楽室の傍にはトイレがあつて、トイレには鏡があつたはずだ！

とりあえず、音のする部屋をゆっくり、通り過ぎようと思っただけ、扉が開いた。

予想通り、壁にかかっていた作曲家たちの顔が歌ったり踊ったり酒を飲んだり……

お酒？

なんと、中央には……鬼、がいるじゃありませんか。

生徒の誰かが「酒天童子だあ！」と、叫ぶと　鬼が気づいて追いかけてきます。

生徒たちは散り散りになって、トイレに逃げ出しました。

男子は男子便所、女子は女子便所に。

鬼は……女子トイレに入りました。エロイですね。何、話し手の俺がエロイだと？

……否定はせん、ドツボに嵌りそうだから続ける。

で、ただ黙って逃げてるわけにもいかず、女子トイレに行つたと気づいた男子の一人が、工具箱からモップをとりだし、もう一人はすっぽんを手にし、最後の一人はバケツを構えて、女子トイレに侵入。

男の子、大人の階段へ一歩、上ります。

鬼が、一個一個、トイレを調べようとした背後から、ガボツ！と頭からバケツを被せ、手当たりしだいにモップでガンガン殴りつけ、女子を救出、とどめにお尻にすっぽんを突き立てて、鬼を退治し、皆大慌てで逃げ出しました、と。

おばけと戦えることを知った生徒たちですが、怖いものは怖い。

最後は、脱出　合わせ鏡のお話。

結局、一階の職員室まで下りて、卒倒しかけます。

ペラペラペラペラペラ……皆のテスト用紙が大暴れしていました。

シュレッダーから撒き戻して吐き出される紙切れが宙を舞い、担任の先生の机からはテスト用紙が生徒に襲い掛かり、その中の一人が自分の得点を見て驚きます。0点でした。

でかかど「わかりません」と答案いっぱいに書いてたら、そりゃ0点でしょう。ただし、それも鏡文字で。

で、ガキどもは女性教諭の机の上に、案の定、コンパクトの鏡があり、それを使って合わせ鏡にしようと考えていました。

テスト用紙が一斉に集まって、生徒たちを包んでしまおうとして、一人の男子が男性教諭の机から、ライターを取り出して、火をつけました。

当然、事態はホラーからボヤ騒ぎへ。テストは何枚も燃え、スプリングラーが発動して、職員室内をびしょ濡れにし、室内を目茶目茶にして、ついでに仲間に火のついたテスト用紙が飛び掛ったり、大変な目に。

だけど、女性教諭のコンパクトを手に入れて、生徒たちは一目散に逃げ出した。

さあ、トイレの鏡へ突入しようとして、鏡から紫の手が伸びてきた。

女子が気転を利かせ、その手にコンパクトを翳すと、手はその鏡に吸い込まれて、無限の鏡向こうに消えてしまったとき。

それから勇気を出して、全員が合わせ鏡の向こうに飛び込んで、脱出。

~~~~~

さて、オチが二つあったりする。

一つ目は、懐中電灯。

大冒険の末、全員がほっと安心した瞬間、学校を後にした瞬間、

懐中電灯がぱつと消えちまったんだ。

慌てて予備の二本目をつけて、最初の懐中電灯を調べたんだ。

電池が入ってなかったんだ。

二つ目のオチは、後日、学校へ頑張つて登校すると、職員室が現れて、テストが燃やされる事件に加えて、不審者が便器に突っ込んだまま気絶していた姿が発見されて、大騒ぎ。

何から何までマツチングしていたので、忍び込んだ六人は不安と恐怖から自ら事実を告白して、その不可解極まりない事態は、とりあえず不審者の仕業と言うことでかたがついたんだ。

その一番肝の据わっていた生徒が、一言。

「俺たち、あの鬼、和式便所の中に頭から突っ込ませて、尻にすっぽん突っ立てたよな？ よく生きてたな、アイツ」

と、不謹慎なことを言つたとさ。

俺のことだけど。

〳〵現実に戻つて〳〵

「お前の話かい！ しかも事実じゃねえな！」

「ノンフィクションだったら逆に不可解すぎます！」

「なんでお前の話はんな馬鹿馬鹿しいのばっかなんだよ！」

「まで、発言からキャラが一致しない。って、俺の仕事仲間！ な

んで混じってんだよ！」

「先ほど、静が寝ている合間に参加なさってましたよ。話しながら気づきませんでしたか？」

「いや、見慣れた顔で、しかも話に熱中してた」

「アホだ」「善がりだ」「自己陶醉万歳<sup>ナルシス</sup>」

「うつさい、参加したんだったら怖い話しやがれ」

「じゃあ、ッ僕、ねるねるじえらじえらのオバさんの」「駄菓子CMのおばちゃんは古いわ、小僧実年齢幾つだ！」

「じゃあ、僕はオペラ座の怪人でも」「マニアックだな！　つつか名作引つ張り出すのかよ！」

「僕は、しゃべる人形でいいかな」「お前、本人やがな」「ひ、酷ッ！」「わあああ！　マジに傷つくな！　ノリ突込みだ、本気じゃねえって！　泣くなああああ！」

「本当の恐怖を教えてやろう、台風の本当の怖さ」「日本人なら誰でも知ってるわ！　災害大国なめんな！」

「じゃあ僕は、死体に咲く花」「普通に怖いから良し。次お前のターン、の前にそっちは何話す予定？」

「……私？　……妖刀、紅静刃でも」「本人談却下！　ネタバレ禁止」「ネタバレとは何だ！」

「……俺が語れるのは、せいぜい呪いの武器防具ぐらいだぞ」「ネタ被りさらに厳禁！　もし無い場合は仕方ないけど！」

「恐怖、底なし胃袋女」「ギャル曽根は黙れ」

「んじゃ、シデン式軟派テクを」「吊れないしもはやホラーじゃない死ね。それがホラーだ」

「では、実際に起こった、船の人失踪事件の解説を」「もうホラーじゃなくてミステリーだよ！」

「……ある勇者に起こった悲劇」「三度目の自分ネタ禁止！　お前<sup>ナルシ</sup>らも自意識過剰だなあ！　をい！」

~~~~~

鏡の向こう……

実際に鏡向こうへ行けば逝くほど……

その存在は霞んで、やがては無^{ゼロ}へと消える……

【ヒヤクモノガタリ】

【百物語】

登場人物

静 聖夜：語りにして騙り

静寂 子小美：探偵役

静 美羅：妹

紅 静刃：妖怪モドキ

渡辺 実：医者

「はっは、結構盛り上がりましたね」

「うむ、酒は皆で飲めばうまい」

「お爺ちゃん、未成年もいますって」

ドンチャンガヤガヤ……夜も更けて行く

……近くのコンビニへ行く途中……

「で、静……その緑色の血液の変死事件犯人は、行方不明の医師でいいのかしら？」

「唐突に語られた静寂子小美ちゃんからの発言に、静聖夜は戸惑いを隠せないまま……」

黙って、酒のんべえの酔い醒ましのポカリを買いに行く途中だったのを思い出し、今の台詞を脳内デリートした」

「確かに戸惑いを隠せてないようですけど……顔が笑っているのが腹が立ちますね。」

まるで、私に解いてください、いや解くのが前提のような、安易なミステリーホラーでしたからね」

「なんだ、そこまでわかってんだったら良いジャン。しおみんの考えているのが多分、正解だよ」

「ならば、解せません」

「何で？」

「医師の動機です」

「罪悪感でいいんじゃない？」

「三流小説じゃあるまいし」

「いや、事実は小説よりも奇なりって言うじゃん。いや、事実は小説よりも素っ気無い、ってか？」

「ならば小説こそ、現実味過ぎていえると言うことでしょう。あの医師は患者を死なせて、罪悪感と罪滅ぼしから、関わった全員を惨殺した、と言うことでしょうか？ いいえ、いいえ それこそ非現実……非小説的過ぎます」

「でも、現実を起こっちゃったんなら、どうしようもないぜ？ アニメや小説の名探偵ってのは、アレは死神とかそう言うのじゃねえよな。勘がよすぎるんだ、犯罪者の勘がな」

「現実的解釈ですか。相手の立場になって物事を考える」

「だがよ、男がいくら考えたって、女の生理痛がわからないように、女だって男の金的痛がわからないのと一緒にだぜ」

「（スルー）……その医師の立場の詳しい立ち位置はわかりますか？」

「知らねえよ。借金だとか離婚だとか、あつたって不思議じゃないけどな……ってか今気づいたんだが、しおみん、顔青いな」

「べ、別に……」

「怖いのか」「こ、怖くなんかッ……」

と、叫びかけた少女の瞳は、男 静の何もかもを見透かす瞳に魅入られ、やがて嘆息と共に答えた。

「ええ、怖いんです。理解できないのがじゃなくて……その……」

「お化け？」

「……」

沈黙は肯定。沈黙は失笑へ

「わ、笑わなくなつていいじゃないですか！」

「いやあゝっはっはっはっは、面白れえゝ、今日一番のオチだったぜ！ さ、はよ家帰つて芋食つて屁こいて寝よ」

「い、言うんじゃなかった。こんな下種に言うんじゃなかった」

「策士、痛恨の失策　にやつはっはっは。さ、酒飲み張り倒して寝よ」

「……最低」

「最低で結構コケッコウゝ。鶏の両親はちゝちらぽっぽゝ」

「……今ここで変質者と叫んで、レイパーと泣き叫んだらどうなるかしら」

「何でもお答えしましょう静寂子小美ちゃん。さあ、何なりとお訊ねください」

「……（顔が笑つてる）……おゝまゝわゝりゝ……さああああん！」

「だあああ！　本当に叫びやがった！　つつても、この辺誰もこないけど」

「あら本当、そっか……ふうん、そうなんだ」

「ほえ？」「そうですか、そうなんですか」「何がなのさ」
「私の初めて」「さ、さっさとポカリ買つて帰るぞ」

チンゝゝゝ　毎度ありゝゝゝ　そして帰宅道ゝゝゝ

「……静聖夜」

「何さ、静寂子小美」

「女性の処女性に触れるとあっさりまじめになりますね」

「やかましいわ！」「さすがは童帝王」「なにその称号！　できれば、ネバーランドガイの方がうれしい」

「止めてください、世界中の子供がグレてしまいます」

「うん、夢と希望を失わせる自信がある」

「では、私の処女の関して」「お前も耳年増なのか！ 年増なのか！」「では、私の謎解きに答えてください」

さつきから、静は百物語に関して、はぐらかしてばかりいる。

会話もまるで取り合ってくれないから、こういう……自滅の話術で、イニシアチブを得てから、

子小美の答え合わせが始まった。

「まず、犯行 すなわち、看護師、医師を殺害したのは、行方不明となった医師、であっていますね」

「俺もだいたいそう思う。」

消去法使うなら、殺害された連中はむろん容疑者から除外。生き残りトリックの線はゼロ」

「続いて、痴呆のお婆ちゃんは、身体的に見て却下。実は凄腕の暗殺者とか、医療ミスでしんだ人の母親と言う線での動機でも説明がつきそうですが、これだけはクリアする要素がほぼ、ゼロ」

「精神科医のお婆ちゃん、ああ話の内容には精神科医としか言っていなかったけど、実はお婆ちゃんね。」

彼女も動機犯行、何より事件は夜勤中に起こったから、ほぼ除外していい」

「犯行時間、犯行行動、そして時間帯とを考えるなら」「行方不明の医師でしかない、と」

「そういうこと。事件はその医師を犯人と見て、目下捜査中」

「……やはり現実の事件だったのですね」

「何でそう思ったの？」

「最初はそうは思いませんでした。しかし、二番目の『学校の怪談』と物語を比べてください」

「ん？ 何がおかしかったの？」

「矛盾性の有無、ですね。」

整合性の無い、フィクションノンフィクション現実と非現実の差から生ずる、違和感。それに怪談のほうの、コンパクト。

女性は普通、かばんに入れて持ち運んで、化粧室や電車の中とか、時間の合間に整えるものです。

机の上に放置していると言うのはあまり考えられません」

「あそつか……まあ、普通は持ち歩いてるよな、コンパクト。常備設置してるって前振りしときゃよかった」

「で、私が気味悪いのは、そこなんです。」

『フィクションとノンフィクションの差から生ずる違和感』……」

「あつはつは、つまり【病院の話】は事実だつてことか？」

「【一から十まですべて事実】か？　と言いたいのです。貴方ほどの推理考察があるなら、その辺の補完は十分できるでしょう」

「そうか？　かなり細かい部分の考察を落つこととして、えらい目にあうんだが」

「誤魔化さないで、教えてください。つまり【犯人は医療ミスで死んだ患者】なんですか？」

「ざつつ　おーる　らいと」

「……」

冷たい風、一陣。

「まあ、科学的には説明つくんじゃない？　幽霊のせいになくても」

「……こじつけです」

「でもないよ。ストレスだつてのは脳を圧迫して、幻覚呼び覚ますトリガーになれるだろうし。ただ、それじゃ集団でつてのは解せないな」

「薬品も医療器具だつて、設備はあつても在庫はつきていたの……あ」

「あ、計画的犯行だったら、備品なくなってたのに説明つくな。幻覚剤とか作ってたって」

「ありえませんか。そんな横領していたら、内部で気づくはずです。気づかないほど杜撰だったか、それとも病院ぐるみだったとか」

「それより気になるんですけど、その最初の急患者さんは、どこにいったのでしょうか？」

『決まっているくでしょう』だろう』

子小美と聖夜の声はもり、

『最初からいなかったくのよ』のさ』

その言葉に、納得する……妹、美羅ちゃん。

「で、こんな夜更けに何でほつつき歩いて」

「ちゃんと保護者同伴です」

「保護者かどうかは疑わしいがな」

「って、紅……くれないなんで女の子ばっか歩かせるんだ」

「ほかは酔いつぶれていたり、それに美羅を男とほつつかせたら、お前が怒るんじゃないか？」

「俺は紫苑とは違うつて」

「それはそうと、興味深い。……その、幽霊が犯人説、お前の中ではどうなんだ？」

「ん、正直判らん　つつか興味ない」

「……何？」

「俺の正直な感想。見ず知らずな医師が二人、看護師二人＋婦長が死にました。おしまい。」

犯人はわかりませんでした。脳異常が精神科のおばちゃんに起こりました。って結果だけで十分」

「わからないのは気持ち悪いです」

「静兄さんは、何を知っているのです？」

「知っているんじゃない、無くて、依頼を遂行しに来たの。だいいち、この事件の解答知ったのだって、姫っちと一緒に超怖いビデオを夜通し制覇した際に、『あ、そっかこのトリックじゃん』って実践見せられて知ったんだし」

「モロそのままじゃないですか！……って、アレ？ 依頼？」

「依頼と言つか、お節介さ」

静聖夜、不意に「姫っちと子小美は先帰ってて」と言い、

「この先は、グロテスクにつき、立ち入り禁止」と念を押して、ボロアパートの前で別れると、

「さて、なんで私は残すんだ？」

「ん？ まあ、妖怪と幽霊って、波長と言つか、原点は同じだから大丈夫じゃないかなって」

「ほお、この妖怪モドキ、がか？」

「元人間にして、妖刀　まあ、そんなのどうだっていいんだ、必要なのは肩書き肩書き」

「……一体何なんだ？」

「話し飛んで、俺のダチに渡辺実って医師がいるだろう？」

行方不明の医師って、奴の友達だったんだ。ぽろつと話してたのを思い出してさ」

向かう先は、粗大ゴミ置き場。

使われていない、古びた……ロッカー……

「昔から、霊症ってのは、『見える』者か、それに『近い』者しか、感じたり、呼び寄せたりしてしまう。」

逆に言うなら【引き寄せる】って話だ」

「……貴様」

紅の表情が凍る。

「百物語だって立派な交霊術だって知ってた？ 物語って、ものがたり【者語】とも書けるだろう？」

【百者語】……だが、百人つてのは数が多い、だが 百の霊つつたら、……まだ【現世】と呼べる中身にある魂も含めたら百になるだろう？

まあ、ぼちぼち成功したって感じかな」

「もともと百と言うのは、物の数の多さを言う。別に百の数を指すのではないぞ」

「そう、だからこそ、『見える』『視えない』関係ない、物の数で『引き寄せる』のが目的さ……まあ」

てけてけ……てけてけてけ……

足、いるか？ 赤と蒼と白どれがいい？ ワタシ、キレイ……

フシルルルルル トウルルルルルルル トウルルルルルルルル

……ガチャン

「……何か余計なものまで集まってきたけど、姫っちゃんおみんには見えないから別にいいよな」

「それも、集まれば何とやら、だ。これだけ集まると靈感が無くて、地場や地霊に影響を及ぼすぞ」

「あ、それに関しては生贄捧げちまうから、大丈夫じゃね？」

と……静聖夜は、振り返り。

自らの右腕を、切り裂いた。

緑色の血を、流した。

「ようこそ、悲しい悲しい被害者さま？　それとも、加害者さまになっちまったのかな？」

振り返っても、誰もいない。のに……

「赤マントさん、赤マントさん。緑色を御所望の浮遊霊がいらっしやいます。至急　そちら側へ、お連れしてあげてください」

さらに、背後の……小さなざわめきが、一段小さくなる。色を提示してた声が、消えた。

「……被害者、なのか？」

「知らない。でも、関係者っぽくはあったよな」

静の腕は……緑色ではなく、人が生きている証の、真っ赤な色を流し

「まあ、今の霊がそうだとしても、俺には関係ないね。俺に関係あるのは……」

不意に、粗大ゴミのロッカーを蹴り飛ばし、中からゴロリと腐乱死体が転がり落ちる。

「ダチがダチの生死を知りたがっていたって話だけだ。」

俺が伝えるのは、残念でした。人生そんなにやさしくないぜ、って答えること」

「……霊界流し、か」

「そんな用語あるの？」

「いや、ただ天国であれ地獄であれ」

「この現世のこと。もっと詳しく言うなら、一枚、フィルターが重なった世界」

「お前の表現は回りくどいな。」

そう、そっちのフィルター向こうにいたのを、お前は『呼び寄せて』戻した』。が、お前の答え合わせなんだな?」

「答え合わせってか、ミステリー風味で言うなら【俺の動機】だな」
「おかげで、異界のフィルターがこちらまで、張ってきたのは、どうするんだ?」

「その辺は大丈夫でしょう。ここが結界の中心だし」

「……何?」

「だってほら、言い出したの俺じゃん」

……

「発端、発信、中心源、まあ本当の発端はあの似非小説家なんだが、これは利用できるな。ってか、アイツを埒埒のど真ん中にいれたら、さすがに可哀想じゃん」

「自業自得だと思うが? あまり遊び半分で死者を弄んでは、然るべき自然の制裁がくるのは当然」

「霊症が自然の制裁って何か嫌だな……」。

まあ、俺そのものが発信源なんだから、連中も俺たかると……このままウチのアパート連中に手を出すと……」

ぶつちゅら……ぺと……ぺと……

路地から、見慣れぬ血液が流れていく。

「まあ、赤マントに緑色ってのは無いし、赤マントも古いからな。そろそろ引退かな?」

「都市伝説、妖怪然り 人の耳に入らなければ、霊症にあらず」

「幽霊妖怪も商売上がったるか。ってか商売じゃねえし」

「理由はわかった。さっさと締めろ」

うんざりしたように紅。

周りの気配が……濃く、鋭く、嫌なものに変わる。

「お前が片付ければ、それで御終いなのだろう」

「おう　任しとけ」

そう言つて、静聖夜は……

道路の中央で、土下座。

「今宵、我らがヒヤクモノガタリに御出で頂いた、百鬼夜行の物の怪の方々、

今宵の御免ご迷惑をかけ、恐悦至極、大変失礼いたしました。

我々のご都合のまま、大変不愉快な思いをさせましたこと、深く謝罪いたします。
まこと

真、此度は、大変失礼いたしました。どうぞ、お怒りをお静め、再び物語の中にお眠りいただくよう、
よろしくお願いいたします」

気配は……

夜明けと共に、去る。

「さて、今宵、俺のヒヤクモノガタリはこれで御終い」

「今日の夕刊の見出し」

【行方不明の殺人医師　ゴミ捨て場のロッカーで遺体で発見される
!?!】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6881e/>

ヒャクモノガタリ

2010年10月8日15時19分発行